〔書評1〕

前芝憲一著『仮名草子――混沌の視角――』

常吉幸子

「混沌の視角」という副題は、さまざまなことを考えさせる。言うまでもなく、これはまず第一に、仮名草子という近世初期小説の領域のつかみ所のない複合性を思わせる。しかし、この論集を読み終えて、何よりも思わずにいられないのは、前芝氏がこの《混沌》と呼ぶしかない領域から、ある明らかな視界の開ける場所に、なんとかたどりついた、そのほのかな自負のようなものである。《混沌》を混沌というのみでは、何も語り得たことにはならない。その中に、ある斜き、方向性のようなものを見いだし、劈開面を探り出し、そのつかみ所のないものを可能な限り明確に規定することは、私たち仮名草子研究にたずさわる者の悲願であるはずだからである。

ここで前芝氏は、『伽婢子』から『百物語評判』『竹斎』『元のもくあみ物語』をへて、『薬師通夜物語』『犬方丈記』から『貧人太平記』へ至るわけだが、この一連の論考は、確かに仮名草子研究における一つの劈開面を提示するものであるばかりでなく、その達成点がつきなみに『好色一代男』に至るのでなく、より直接的に仮名草子の系列に位置する、『貧人太平記』というかつて「奇書異書」とも評された作品だという点である。その性格を記述するとともに、その『一代男』に比すればこぶりではあるが、確かな文学作品としての成功に認めようとする、その姿勢は独自なものである。氏みずからこの『貧人太平記』が「天和二年」を仮名草子と浮世草子の便宜上の境界線とする通念に、幾重にも疑問を投げかけるものとして、序における「仮名草子をどうとらえるか」という問題提起と呼応し、この著書の結構を整えている。それは、重要な問題提起であるには違いない。この氏による最初の研究書は、結果として、この問いに対する答えを与える方向性を示しえている、といえるだろうか。

しかし、その問題提起は、実は、このひとまとまりの論考に本来的なものではない、と言わなければならない。というのは、ここで示される問題提起は、この一連のものを引き出した前提ではなく、逆におのおのの個別の論を誠実にこなしていく過程で、到達されたものだからである。「仮名草子研究の多方面に渡る進展

にともない、仮名草子を単に浮世草子への過渡的形態としてとらえることや一様にそこへ収斂することの誤りは明白になってきた」としても、氏自身がこの認識に至ったのは、ここに見ることのできる一連の論考に示される、その探究の果てにおいてだからである。「ここの作品の諸要素を分解・剔抉してそこだけに方法概念や主体概念の新旧を見るのではなく、作品を丸ごと評価していくことが大切になってくる。」というのも、先の認識の共有によってそのことが「大切になって」きたのではなく、「作品を丸ごと評価」することこそが、氏が十数年間の研究歴において実践してこられたことだからである。こざっぱりとまとまった結構を持つ著書として、仕上がっているとはいえ、なお本質的には、ご自身の「仮名草子研究の集大成」であり、地道に仕事を進めてきた、研究者としての履歴書であることを否定できないのである。

その意味で、もっとも初期の論考であり、多分に謙辞ではあれ「(未完)」と付記して当初出された、「『伽婢子』論序説」にも、大きく手を加えることなく、おそらくご自身の発表当時の意図を十分に伝えるためのものであろう補筆に留まって、「論旨を動かしていない」という断り書きの通りとなっている。

「(翻案としての)技術論とは別の視点から」という論の方向づけが、「夜咄の世界で供され息づく」、いわば文芸としての〈いのち〉論に行き着くのは、発表当初はまだ大学院生であった筆者の素朴な文学少年ぶりとその〈ふるさと〉への現在の筆者の郷愁がうかがわれはするが、また、研究書にもそのぐらいのものはあってもよいと私は思っているが、あまり共感しなければならないような義理は感じない。「龍宮の上棟」で重々しく始まる『伽婢子』が、「夜咄」として供しうるものを多く含んでいるからといって、全体を「夜咄」として「フレームアップ」しているとは思えないし、作品を前からも後ろからも、どこからも見ることのできる読者が、末尾の一節のみによってそう一面的に丸め込まれるとも思えない。「夜咄」として息づくのなら、「剪燈新話の抜書」として、「息づく」こともあろう。また、伝承をとりいれて「夜咄」として享受しうるものに仕立てたとすれば、それはまた技術の問題でもあるはずである。筆者は「『伽婢子』の咄」を極力発表当時の問題意識において提示し、その出発点を示しているのである。

目覚ましいのはそこからの展開、第二章「『百物語評判』の成立」及び、第三章「『百物語評判』の論理」である。「仕掛人はだれか?」と問いかけて、出版への経過についての記事が、序文と跋文において食い違っていること、更に短時日で(「日あらで」)その補筆・編集がなったと読めるのに(このことは、内容の「練り」が足りない、また、挿絵が「一話ずつずれている」、と言ったことにも裏づけられる。)、この刊行が山岡元隣の死後十四年も経ており、その間放置されていたと思われること、更にまた、実際に「長子」元恕が山岡元隣の遺志を継いで刊行したといえる『諸国独吟集』の序文に照らして、そのことがいかにも不自然である、等と着実に推理を進め、書肆「銭屋儀兵衛(梶川常政?)」を背景に企画されたもので、この梶川常政は、「その(=『百物

語評判』の）刊行に際し、元隣の門人たちの中でも中心的に采配をふるったとし、「彼（＝梶川常政）こそが、（序文に記すように）「百物語評判会」を記録し、そして十四年間保管していたのを、天和・貞享期の怪異小説ブームの折りに刊行を企だて、元隣の「遺稿」であることを看板にしつつ、五巻五冊の書物となるよう元恕を引っ張り出し編集した仕掛人なのである。」と小気味よく明解な結論にいたる。各巻の話数や長さを鍵に、内容・記述を検討し、特に挿絵の他作品との類似の様子から、「近世初期挿絵師たちの狭い共同体のあり様」を推定し、梶川常政の関与とこの「成立」の状況を固めていく手際は鮮やかである。怪談会はいつ行われたか、その際意識された流行の怪異小説の中には『伽婢子』が含まれていたらしい、元隣を中心としたかの怪談会以後に補われた話はどれか、等の考察は、間断なく読める。

これらの具体的事柄を固めていく論述は、『百物語評判』が当時の怪異の咄・物語の享受の様相を知るうえで、いかに重要なものであるか、を論じる次章「『百物語評判』の論理」によって真に生かされることになるだろう。〈怪異〉の後に教訓が付属するのとはまったく違う、別の発話者によるとみえる「評判」とともに提示する姿勢は『新御伽婢子』にも共通し、『伽婢子』『狗張子』の追随者である林義端の『玉櫛笥』（元禄八年）『玉箒木』（元禄九年）に見られる、観音の霊験とされるとはいえ単に偶然の幸運と見做しうる話や、その真相は〈怪異〉ではなかった、と落ちのつく話、またことさらに焼け焦げた跡の「証拠」を誇示する話などが、同種の意識の基盤を感じさせるものとして思い浮かぶ。儒教合理主義や、がんらいあった民衆レベルでの現実性から来る〈不信〉は、仏教唱道者も含む〈怪異〉の語り手たちのいわば仮想敵のようなものであり、「夜咄」があるたびに、その種の著作が生されるたびに、それはこの〈不信〉との不断の折衝の場でもあったはずである。一方は執拗に証拠を提示しようとし、一方も疑いながら明らかな事実（？）は認めざるえない。そのあたりに、微妙な均衡点があったはずである。

〈怪異〉の語りは、信じるか信じないか、を起点とする種々の問題意識が、暗黙のうちにつきまとうために、前芝氏の言う「呪文」によって魑魅魍魎を跳梁させたりするかもしれない。しかし、こと『百物語評判』に関しては、結果として怪異の存在を許していることに、さほど怪しげな仕掛けを認める必要はないのではないか。『朱子語類』では蜥蜴が群れて雹を吐くのも確かな目撃者のいるしかも説明可能な現実であった。それなら「垢ねぶり」は本当に「化生」しえたかもしれないではないか。氏自身も「結果的に怪を容認してしまったことと、先の「見こし入道」などを批判したときの態度や現実認識などとは、元隣にとっては矛盾するものではなかった。」という結論にいたったのであれば、先の「呪文」云々はことさらであったと気づかれたはずである。

「『百物語評判』が天和・貞享の怪異小説ブームの折に刊行が企てられた」ことの意味は両義的であった。〈怪異〉を馴致して朱子学の枠内に収めると同時に、その〈場所〉を保証した。前芝

氏の見解とは必ずしも一致しないかもしれないが、もし仮に〈怪異〉が混沌であったとすれば、『百物語評判』はすでにその混沌から脱し、それを外から記述する視点を持っている点で、やはり、より現実の側に足場を持った作品と見做すことができる。このことは、この著書全体の流れにおいて、存外重要なことではないかと思われてこないでもないのである。

　というのは、第四章「『竹斎』の笑い」を起点とする以後の展開が、「竹斎」の人物像の継承を軸としながら、「名所記」の物語化・講釈的要素による事実性の強化といった現実への志向を強めつつ、文芸としての自立を獲得するものであり、また、一見古典作品の模倣や見立てにすぎないと見えるものも、単なる言語遊戯や物語化の手法にとどまらず、「自己の内的衝動を隠蔽・偽装しながらも、充足させ」、「野非人たちの抗争への「正義」の付与」といった作者の意志を達する創造的なものであったりする、明確な方向づけがあるからである。

　第五章「『是楽物語』の構造」は、是楽と友名の描かれ方のアンバランスの問題について『是楽物語』のあくまでも基調にあるのは、「友名」の恋愛譚である」が、「「竹斎」の属性が「友名」ではなく「是楽」に転移した結果」主人公でない「是楽」が過剰にしゃしゃり出ることになった。と明確な説明を与えている点が注目される。ただ、「「是楽」が「語り部」として作者の衒学性を全面に負った」ことも一方の要因としてあげられているのだから、「竹斎」よりも「楽阿弥」の方が……、と思わないではないが、いずれにしても「竹斎」の系譜をひく仮名草子的主人公の型を与えられたことが、機械的に（?）彼を主人公めかせた、というのは魅力的な見解である。すなわち「山本友名」は中心として展開される恋愛譚の主人公であり、「是楽」は主題としての享受的雰囲気をになう語り手であった、というような〈分業〉のようなものをイメージすればよいのだろうか。作中における役割としての主従関係が、作中人物としての〈主〉と〈従〉にそのままなりうるとも思えないが、第四章でも「竹斎」自身が風刺・笑いの対象にならなければ「小説」として成立しえなかったとするのに通ずる、前芝氏独自の物語観・小説観が、ここは背景にあると考えた方がよいだろう。

　第六章「『元のもくあみ物語』の夢」は、『元のもくあみ物語』が、京・大坂の読者をターゲットに、「江戸のプレイ・スポット案内」つまり「小説版『江戸雀』」として、江戸で企画・出版された、仮名草子出版史上貴重な作品だとする。すなわち少なくとも名所記的なものの物語化であるという点と、登場人物の竹斎的類型性において、『是楽物語』に通うわけで、同様に現世肯定的な享楽性においても、浮世草子にさらに近づきつつある「新小説」として、画期的であったということか。ただし、〈虚構〉の確かさをいうには「夢」は小手先であり、「享楽性」も本質的ではないと言わねばならない。

　何といっても第七章から第九章にかけての最終三章は、この論

集における白眉というべきであろう。災害ルポルタージュものとして知られる一連の仮名草子が、この様に魅力的に記述されたものを私は知らない。模倣・見立てが、古典の利用が、その意図と効力において、確かな視点から的確に分析されている。この論集の構成は、怪異の語りの混沌から、現実あるがままの明解さへと、脱出していくが如くである。もちろん現実それ自体が一つの混沌には違いないが、この到達点においては語りそのもの、表現そのものが、古典の受容・利用と現実的意図のかかわりにおいて、精確で明解なのである。

しかし、あるいはこれは、あやうい錯覚かもしれない。この展開は、筆者の研究者としての力量の成熟とパラレルだからである。物語化の鍵となる人物造形や、「講釈」の方法などが多く共有されながら、まったく新しい世界が開かれているかのようであるが、それは、これらが現実に当時おこった出来事の人間味あふれる記録であるからばかりでなく、類型的要素に惑わされない、やわらかで歴史的素養にとんだ筆者の力量が開示したものとすべきであろう。

（一九九五年二月二八日、和泉書院、Ｂ６判、二五三頁）

（つねよし・ゆきこ　活水女子大学助教授）